

令和元年6月18日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03226

研究課題名(和文)先住民の文化伝承における継承者と伝達者の関係性についての研究

研究課題名(英文) A Study on the relationship between mentor and mentee in the process of transmitting indigenous cultural tradition

研究代表者

久保田 亮 (Kubota, Ryo)

大分大学・経済学部・准教授

研究者番号：80466515

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、アラスカ州南西部の先住民村落における伝統ダンスの伝承活動の歴史を再構成することで、先住民の文化継承の特質を探った。その結果明らかになったのは、文化伝承実践が知識や技術の享受という一方向的なものではなく、学習した知識に基づく主体的な文化の創造に対する承認・非承認というフィードバックを含んだものであること、先住民の文化伝承が社会経済変化、主流社会文化の影響の大きさ、伝承実践の中心となりうる個人、といった要因を考慮すべきであること、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ先住民を対象とした先行研究は、先住民にとっての文化的差異は重要な政治資源であること、ならびに伝統文化の政治利用については、先住民社会の内部でも様々な議論があると指摘している。本研究はこれら先行研究の指摘を踏まえ、これまで一面的に描かれる傾向があったアラスカ先住民の文化継承過程を、古老と若者という非対称な関係性にある両者の営為を視野にいれながら再構成することができた点に学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study explores some features on the process of transmitting cultural tradition to next generation among Alaskan Natives. By analyzing the history of traditional dance performance in a native village in southwestern Alaska, it becomes clear that its transmission involves bidirectional process. It is also suggested that socio-economic-political change, cultural elements originated from the mainstream society, and the characteristic of individuals who are the central figure of this project have a various influence on indigenous cultural transmission.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 アラスカ先住民 ユピック 伝統芸能 ダンス 文化継承

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

アフリカ系アメリカ人公民権運動に代表されるマイノリティの地位是正運動の展開以降、文化的差異を保持することは、マイノリティとマジョリティの双方にとって積極的な意味を持つようになったと言われている(青柳 2006:4 / 引用文献)。この点はアメリカ先住民にとって、とりわけ重要である。連邦政府による先住民としての承認は、他の文化的マイノリティがアクセスし得ない政治的・経済的権益をもたらすためである(Castile 1996:764 / 引用文献)。

アメリカ先住民を対象とする先行研究によると、アメリカ主流社会との文化的差異は先住民がアメリカの政治経済に参入するための重要な資源であるとの指摘がある。また、あからさまな伝統文化の政治的利用に関しては、先住民コミュニティの内側でもさまざまな議論や衝突があるとも指摘されている(Dombrowski 2001, 2014 / 引用文献)。

研究代表者は2001年12月より現在にいたるまで、アラスカ州南西部の先住民コピックの伝統ダンスに注目し、それが現代コピックの日常生活にいかにか織り込まれているのかについて文化人類学的に検討を進めてきた。その中で、コピックがアメリカ社会の先住民という社会的立場付けを巧みに利用しながら伝統文化伝承を首尾よく実践していること、またコピックは主流社会との交渉に伝統文化たるダンスを利用するばかりではなく、コミュニティレベルの社会関係の再生産の契機としてダンスを利用していることを明らかにしてきた。

しかしこれらの研究は、伝統文化に対するコミュニティ内部の多様な視点を加味したものはなかった。特に「伝達者」としての古老の視点や評価を重視する一方で、「継承者」としての若者が伝統文化をいかに捉えているのかについての検討が十分ではなかったのである。

この傾向はコピックについての近年の文化人類学的研究においても見て取れる。これらの研究は古老との協働研究として実施されており、伝統文化に関する貴重な情報を集積したという点で大変意義のあるものだ(たとえば Barker et al 2010 / 引用文献)。しかし古老の声以外の、同時代を生きるコピックの声は背景に退いてしまっている。

ゆえに文化継承という実践を理解するためには、伝達者たる古老だけでなく、古老とは異なる政治的・社会的・経済的位置付けにあり、かつ古老とは社会経済環境を生きる継承者が、伝統文化たるダンスをいかに捉え、自身の文化世界の中にどのように位置付けているかを検討する必要があるのだ。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一にアラスカ州南西部の一先住民コミュニティで実践されてきた伝統文化伝承の歴史を再構成することである。本研究で文化実践として取り上げるダンスはキリスト教宣教師の抑圧・コピックによる再興をへて、現在に至っている。本研究では、再興されたダンスが定住化や先住民運動といった社会経済政治変化のなかで、どのような実践されてきたのかに関する民族誌的資料を収集する。

この歴史過程の再構成において、とりわけ重要なのは1950年代、1980年代、2010年代における文化伝承の実態についての資料収集と分析である。1950年代は移動生活から定住生活への転換期、1970年代はダンスが授業科目として学校教育に取り込まれた時期、2010年代はコミュニティのダンスグループが複数に分裂した時期、にそれぞれあたる。こうした文化伝承の転換点において、どのような事態が現場で生じたのかについての資料を手掛かりに、文化伝承のダイナミクスを理解する。

さらに、これらの事例研究を通して先住民の文化伝承に関するモデルを確立することがもう一つの目的である。伝達者と継承者の非対称な関係性や相互作用を踏まえたモデルの確立を目指す。

3. 研究の方法

本研究は、北方先住民・アラスカ先住民に関する民族誌的研究をはじめとする先行研究の渉猟と、アラスカ州都市部および辺境部におけるフィールド調査により、一次資料、二次資料を収集する。

文献調査においては、先住民の文化伝承に関する民族誌的研究をはじめとする先行研究の渉猟を中心に行う。

フィールド調査では、研究代表者の長年の調査拠点であるアラスカ州南西部の先住民コミュニティ(以下A村と表記する)とアラスカ州第一の都市であるアンカレッジを現場とする。後者をフィールド調査の現場に含めるのは、アンカレッジに移住したA村出身者を研究の射程に含めるためである。伝統ダンスの実践者に対する聞き取り調査およびダンス実践への参与観察を主たる資料収集方法として用いる。

4. 研究成果

(1)文化伝承過程の再構成

1950年代～

定住村として設立されたA村への移住以降、文化伝承に大きく影響を与えたのは学校教育制度がコピックの生活に導入されたことだった。村の子供たちは1日の大半を教室で過ごすようになり、しかも8年生を修了すると村外の寄宿舎学校に送り出され、数年村を離れて暮らすようになったのだ。

ただし学校教育制度の導入により、子弟教育にコミュニティが果たす役割は相対的に減少したことは確かなものの、コミュニティ活動としてのダンスは依然として活発に実践されていたことが歴史資料から伺える。たとえば、A村の学校に当時勤務していた教員の書簡には、大半の生徒が伝統ダンスに参加するために隣村に出かけてしまったために、授業を取りやめざるを得なかった、といったことが記されている。さらに毎年クリスマスと復活祭の時期には、大規模な伝統ダンスの集いが催され、大部分の住民がそれに参加していたこともわかっている。

また寄宿舎学校生活が始まることをユピック文化実践と完全に切り離されたものでもなかったことも指摘できる。それはA村子弟が送り出された寄宿舎学校が、先住民文化と主流社会文化の双方を尊重した教育方針を採用していた点(Kleinfeld et al 1979/引用文献)、そして課外活動の中で伝統ダンスを披露する機会を生徒たちが「タレントショー」という形式で企画し、実施した点などに示されている。

この局面でより重要なのは寄宿舎学校での生活が主流社会の文化に触れる機会をユピック子弟に提供したということ、若者たちが古老という社会的・文化的権威が不在の中で伝統ダンスを主体的に実践することが可能だったこと、そして寄宿舎学校生活を経験した彼ら子弟たちがのちの文化伝承活動において中心的な役割を果たすことになること、の3点である。

1980年代～

1970年代から1980年代にかけて生じた重要な出来事は、村学校で高等教育サービスの提供が始まったこと、学校教育制度の枠組みの中で伝統ダンスの伝承活動が始まったことである。

学校教育における文化伝承教育は「文化遺産プログラム」と名付けられ、1984年から始まった。寄宿舎学校からアラスカ大学に進学し、教員として村に戻っていたJ氏と、演劇芸術ディレクターであるW氏の両氏がこのプログラムを牽引した。またJ氏の祖父であるF氏をはじめ、村の古老の中にはこのプログラムに協力する者たちがいた。

文化遺産プログラムで生徒たちが取り組むのは、ユピック伝統文化を基調とした創作劇の制作および披露だった。ユピックの口承伝統、伝統儀礼、歌、ダンスといった要素をふんだんに詰め込んだこの創作劇は、内外の注目を集め、アラスカ主要都市や海外での公演を実現するまでに至った。

このように高く評価されている文化遺産プログラムであるが、A村での聞き取り調査の結果、開始当初のプログラムに対する評価はそれほど好意的ではなかったことが明らかになった。文化遺産プログラムの中心人物であるJ氏によると、学校で伝統ダンスや創作劇を教えることは時間の無駄だというのが当時に大方の意見であったという。またそれまで村の伝統ダンスの中核を担っていた古老の中には、若いJ氏が中心となって進める伝統ダンスを素材とした舞台芸術の創造を文化継承活動とすることを快く思わなかった者もいたという。さらにF氏のようにJ氏の活動に積極的に協力する古老がいた一方で、一切ダンスに関わることをやめてしまった古老もいたという。

文化遺産プログラムの実施をめぐるコミュニティ内の不和は、伝統文化の伝承に対する価値づけやその主導権をめぐる世代間の衝突だったと考えられる。ユピック伝統文化にアメリカ主流社会の諸要素を取り込んで融合し、当時の社会経済状況に適合した文化実践としてダンスを再構築する試みに対して、コミュニティの人びとはそれほど寛容ではなかったのである。そして、この試みは古老の伝統ダンスの権威としての立場を危うくするものとしても捉えられたと考えられる。

2010年代～

文化遺産プログラムの開始以降、A村には二つのダンスグループが存在することとなった。一つは古老B氏をリーダーに、ダンス実践に熱心なA村住民を中核とするグループ、もう一つはJ氏をリーダーに、文化遺産プログラムの受講生を中核とするグループである。ただしこの二つのグループは相互に排他的な関係にはなく、一方のグループの演技にもう一方のグループのメンバーが参加することが妨げられるようなことはなく、双方のグループの演技に参加する村落住民は少なくなかった。

しかし2010年になると、この体制に変化が生じた。20代前半の若者たちを中心にして新たなグループが創設されたのである。彼ら/彼女らの大部分は、J氏による文化遺産プログラムを受講した経験があり、また伝統ダンスに積極的な親の影響もあり、小さい頃から積極的に伝統ダンス活動に参加してきた若者たちだった。また、この若者グループのメンバーは、既存の2グループと共同で伝統ダンスを披露することはなかった。

グループ設立の経緯に関する聞き取り調査から、若者たち自身が創作した演目を披露するチャンスを作るため、同年代の人びとがダンスを介して交流する機会を作るため、既存のグループでは自分が満足できるパフォーマンスができなかったため、といったことが新たなグループを設立した経緯として挙げられた。これらの理由は、いずれもA村で提供される文化遺産プログラムを通じた学習を通して、若者たちが伝統ダンスを主体的に実践することが可能となったこと、そして彼らの主体性・自律性を十分に発揮するためには、体制の刷新が必要だったことを示している。

またこうした若者主体の伝統ダンスの実践に対するコミュニティの評価は、1980年代のそれとは異なり、大変好意的なものだった。この好意的な評価、とりわけ古老からの演技に対する

好意的な評価は、若者たちが主体的な伝統ダンス実践を継続する上でのきわめて大きな動機付けとなったという。すなわち伝統的権威である古老の承認が、結果的に若者による内向きの活動だったダンス実践を後押ししたのである。

2010年代においては、1980年代に見られたような古老と若者との間の伝統文化継承のイニシアチブをめぐる不和は生じていない。その要因として、1980年代と比べて、言語に代表されるユピック伝統文化が弱体化傾向にある点が挙げられる。民族言語が生活言語としての地位を脅かされている現状だからこそ、民族語を用いて歌を自ら創作し、踊りを披露する若者たちの存在は、より高く評価されていると考えられる。

なおこの若者グループは2019年現在活動休止状態にある。グループの中心人物が相次いでアラスカ州都市部へと移住してしまったことがその理由である。

(2) 先住民による文化伝承実践の特質

アラスカ州南西部の先住民村落での伝統ダンスの継承活動の事例から、伝え手である古老と学び手である若者との関係に注目すると、彼らの文化伝承の特質を以下のように整理することができる。1950年代においては、古老と若者は「教える 学ぶ」の関係にあるものの、寄宿舎学校への就学のため、若者は古老不在の中で文化伝承を実践する環境の中で青年期を過ごしている。1980年代になると、古老と若者の間には「教える 学ぶ」という関係だけでなく、伝えるべき文化をめぐって競合する関係性があることも見て取れる。若者世代は伝統文化を素材とした「新たな」文化実践を創造した。しかし、彼らの実践は社会的文化的権威たる古老からの全面的な承認を得ることができなかった。結局、この世代間の不和は、古老の「引退」および若者世代の営為に対する外部社会からの承認を通して解消されることとなる。2010年においては、古老と若者の間には「教える 学ぶ」関係だけでなく、「承認する 提示する」という関係性が見て取れる。一方で若者は学習した知識と経験に基づき、新たな伝統ダンスを公的に提示する。他方で古老は、若者の行為遂行能力を称賛することで、その活動を承認するのである。

以上の点は文化伝承実践が知識や技術の享受といった一方向的なものではないことを示している。またこうした特質と並び、先住民の文化伝承が政府主導の政策に伴う社会経済変化、主流社会文化が先住民コミュニティの生活に及ぼす影響の度合い、そして活動の中心となりうる個人が存在するかどうか、といった要因を考慮することが、彼らの文化伝承を捉える上で重要であることがわかった。

< 引用文献 >

青柳清孝

- 2006 『ネイティブアメリカンの世界 歴史を糧に未来を開くインディアン』東京：古今書店。
Castile, George Pierre
1996 “The Commodification of Indian Identity”, *American Anthropologist* 98(4):743-749.
Dombrowski, Kirk
2001 “Against Culture: Development, Politics, and Religion in Indian, Alaska”,
University of Nebraska Press.
Dombrowski, Kirk
2014 “Culture Politics: The Story of Native Land Claims in Alaska”, Syron Design Academic
Publishing.
Kleinfeld, Judith Smilg
1979 “Eskimo School on the Andreafsky: A Study of Effective Bicultural Education” New
York: Praeger Publishers.
Barker, James H. et al
2010 “Yupit Yuraryarait: Yup’ik ways of Dancing”, University of Alaska Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

久保田亮『文化継承のダイナミクス：アラスカ先住民の踊りの世代間継承をめぐって』第163回東北人類学談話会、於東北大学、2017。

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

久保田亮『伝統芸能を支える文脈：アメリカのアラスカ先住民ユピック』「先住民からみる現代世界 わたしたちの〈あたりまえ〉に挑む」, Pp.163-165、2018。

6. 研究組織

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。